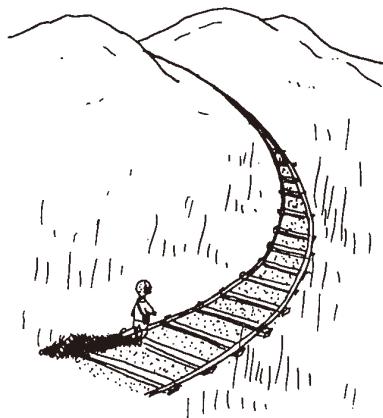


くり返してはならない戦争

野 田 曉



第二次大戦の末期、私は名古屋市昭和区の小学校六年生だった。

名古屋の町にも空襲の危険がせまつて来て、学童は一部をのぞいて、「集団疎開」（そか）「縁故疎開」（えんごそか）と分かれ、名古屋をはなれなければならなくなつた。小学校一年生の弟は、なきなき母親の里の田舎へひとりで「疎開」をさせられ、私は進学のため、残りゆう組に入つて勉強することになつた。

私と同じクラスの友だちも約半数は、「集団疎開」といって、学級ごと犬山のお寺にうつつて生活をしていた。家族からひとりはなれて、いつ終わるとも知れぬ集団生活をよぎなく（やむを）されうえとさみしさを「お国のために」にたえしのんでいた小学生の気持ちはどんなだつたろう。時々、残りゆう組を代表して犬山へ「慰問」（い）に行つたが、手みやげといつても、主食すら事欠くころなので、かんパンやいり豆などを整えるのがやつとのことだった。久しぶりの面会に、友

だちは、親といっしょに暮らす私たちをうらやましがつて、だんだんやり切れないふんい気になつてくる。私たちが帰る時には、名古屋へいっしょに帰りたいと言つて泣きすがる友だちもいてほんどうにつらく悲しい別れをしたものだつた。

聞くところによると、「脱走」といつて、お寺をぬけ出し、線路伝いに名古屋へ向かつて歩いた友だちもあつたということだ。

一九四五年（昭和二十年）三月十二日の未明、夜間空襲（しゆう）があり、私の家はあと形もなく燃えてしまつた。

防空壕に避難していた私は、「ビュ・ビュツ」という音を耳にしたとたんに、数十か所に飛び散つた火のかたまりを目の当たりにして、きょうふときんちょうどでぼう然となつた。

両親とはぐれてしまつた私は、三才の弟を背負い、四才の弟の手を引いて、親せきをたよりにまさに命からがら逃げ歩いた。おじの家にたどりついた時、はじめてはだしであることに気づいた。子どもたちを案じながらおじの家に来た両親に会つた時、喜びとほつとした気持ちで涙が止まらなかつた。

翌日は、あいにく雨降りだつた。「大火の後は雨になる」と聞いていたが、その通りになつた。わらぞうりで雨の中を歩きながら、こわかつた前日のことや、焼けてしまつた家のことを思うと、つらくみじめな気持ちになつていくのだった。

名古屋は空襲がますます激しくなつてあぶないし、住む家もなくなつてしまつたので、それか

らは、弟が疎開していた田舎のはなれを借りて母子が生活することになった。その後も名古屋は大空襲が続き、五月には名古屋城が焼け落ち、八月には名古屋の大部が焼け野原になってしまった。

そんな中で、中学校の入学試験に合格したものの、名古屋ではあぶないというので、田舎の中学校へ転校することになった。四キロの田舎道を歩いて通つたその中学校も、地方の小さな都市にあつたせいか、七月に空襲を受け全焼してしまつた。同じころ、父の会社も焼け、命からがら田舎の家へ逃げて来たのだった。

田舎の生活は安心して暮らせるかというと決してそうではない。空襲こそないが、戦闘機からの機銃掃射(じゅうそくしゃ)といって、飛行機から直接、地上の人や物をねらつてうつてくることがある。運悪く橋の上などを歩いていて亡くなつた人の話も聞いた。

忘れもない八月十五日、とうとう日本は戦争に負けて、終戦をむかえた。

それまでさかんに歌われた、戦争に関する歌は、いつさい歌われなくなり、戦争をあつかつた内容の読みものは、すみでぬりつぶしてしまうことになつた。勉強も教科書がないので、国語は新聞の社説を教科書代わりにした。

国を愛し、国を守ることの尊さを教えたりっぱな内容に、すみをぬるということの意味が当時の私には、おそれ多いことのように思えて、頭の切りかえに時間がかかつた。

多くの人の命が犠牲になつた戦争、戦地で命を落とされた人はもちろんのこと、私の身辺でも

思い出せば、悲しい記憶がよみがえる。

空襲の後の朝会で、

「今日は悲しい知らせをしなくてはなりません。」

と言つて、爆弾^(ばくだん)で死んだ級友のことを校長先生から聞いた時は、ほんとうにつらく、言いようもない悲しみのどん底につき落とされたものだつた。また、爆弾のため鶴舞公園^(つるまこうえん)の近くで、大けがをして歩くこともできない人が、おがむように助けを求めながら動かなくなつてしまふのを見たときには、どうすることもできず、きょうふ映画の中にいるようだつた。の人たちの「死」は何だったのだろう。

あの終戦から三十数年もすぎたら、私たちの生活は、物質的にはめぐまれすぎて、ぜいたくになれ、感謝の気持ちすら忘れて、精神的に弱体化している。

近所の奥さんは、レストランでアルバイトをしていて、残飯^(ざんぱん)の量におどろき、「食べられるだけ注文すればいいのに。」となげいておられた。

集団疎開で学童が夢見たものは、「両親」と「食べ物」だつたという。一度でいいから満腹感を味わつてみたいというのが学童の最高の望みだつたことと比べて、今は何とありがたい時代になつたことだらう。

しかし、手元の新聞には、「悲惨なカンボジア難民^(さんみん)——欠乏する食糧・薬品」という見出しの記事が出ている。米の配給が一日一回だけで栄養失調になり、水の配給も一日一回に限られ、難

民はどろ水で顔を洗うとか、あの集団疎開よりもっと厳しい現実に直面している人たちが、いまだに世界のあちこちにいるという事実を、私たちは忘れてはならない。

教科書攻撃によつて、「平和」を教えることがあやうくなりかけているこのごろは、戦争前のようすとていているといわれているが、戦争への道を、二度とたどるようなことがあつてはならない。戦中・戦後の体験で、私たちは心底から戦争をにくみ、ぜつたいに許してはならないと思つてゐる。

世界にはこりとする平和憲法の精神をつらぬき、眞の平和を愛し求める国民であるよう、一人ひとりが正しいはんだん力を身につけ、手を結び合おうではありますんか。

(名古屋市天白区在住)

写真の父は年をどちらない

今井公彦



おじいちゃんより年とつたお父さんがいる——こう聞いたら、君たちは「そんなばかなことはあるものか。」と思うだろう。